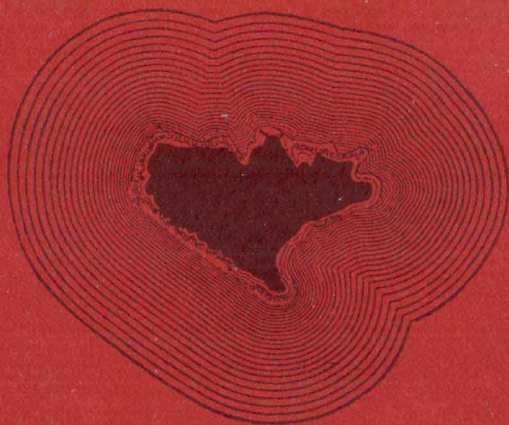


最初の衝撃

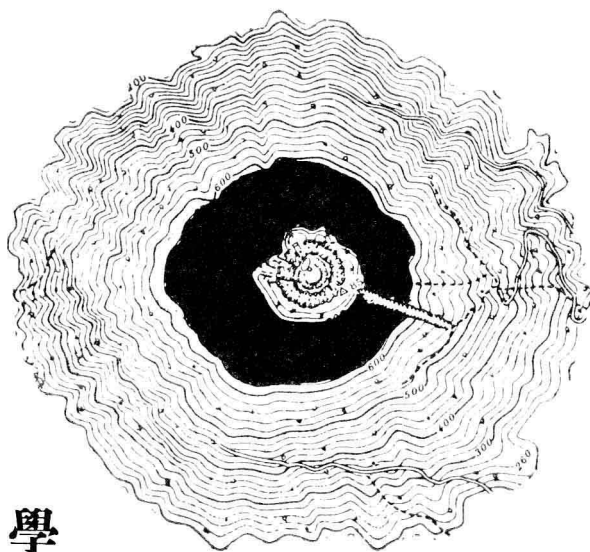
全集・現代文学の発見

第巻 最初の衝撃 學藝書林



集・現代文学の発見・第二卷

最初の衝撃



學藝叢刊

全集・現代文学の発見 第一卷

最初の衝撃

著者代表 村山知義 ©

編集者 八木岡英治

発行者 田寺正敬

印刷者 和田彰三

発行所 株式会社 學藝書林

東京都中央区西八丁堀二の十二 番号一〇四 振替東京一〇八二一

印刷・製本 東洋印刷

昭和四十三年九月十日第一刷発行 七五〇円

送料九〇円

落丁・乱丁はお取り替えいたします

目次

大杉 榮

奴隸根性論 Ⅱ 9

日本脱出記 Ⅱ 26

宮嶋資夫

坑夫 Ⅱ 49

辻 潤

ですぺら Ⅱ 105

武林無想庵

性慾の觸手 Ⅱ 145

平戸 廉吉

アラベスク Ⅱ 194

力闘 Ⅱ 198

私の未来主義と実行 Ⅱ 203

高橋新吉

ダダイスト新吉の詩 Ⅱ 205

萩原恭次郎

死刑宣告 Ⅱ 215

壺井繁治

頭の中の兵士 Ⅱ 221

勲章 Ⅱ 224

崖を登る Ⅱ 225

岡本潤

夜から朝へ Ⅱ 231

中野秀人

第四階級の文学 Ⅱ 237

高村光太郎論 Ⅱ 241

村山知義

兵士について Ⅱ 253

何が道德か Ⅱ 259

平林初之輔

唯物史観と文学 Ⅱ 269

第四階級の文学 Ⅱ 275

前田河廣一郎

三等船客 Ⅱ 281

葉山嘉樹

淫賣婦 Ⅱ 313
セメント樽の中の手紙 Ⅱ 327

岩藤雪夫

ガトフ・フセグダア Ⅱ 331

平林たい子

施療室にて 〓 365

殴る 〓 379

小川未明

君は信ずるか 〓 395

松永延造

職工と微笑 〓 403

井上良雄

文芸批評といふもの 〓 473

芥川龍之介と志賀直哉 〓 491

秋山 清

解説 〓 505

裝 本 栗 津 潔

最初の衝撃

大杉 榮 「奴隸根性論」ほか 「日本脱出記」

おおすぎ・さかえ 一八八五—一九二三。香川県に生る。父が軍人であったので陸軍幼年学校に入るが自由への憧れから文学と自然科学書を耽読、上官に反抗したりして退学処分。東京外国語学校フランス語科に入る。在学中より幸徳秋水、堺利彦らの非戦論に感銘し平民社の社会主義研究会に参加したが卒業の明治三十九年、電車賃値上げ反対運動で起訴、つづく赤旗事件などでたびたび投獄された。大正元年荒畑寒村と「近代思想」を創刊「征服の事実」「生の拡充」などを発表してアナルコ・サンディカリスムの立場を固めていった。同誌廃刊後は「平民新聞」「文明批評」「労働運動」などを発行、プロレタリア文学前史というべき独自の活動の時期に入る。「日本脱出記」などにも明らかな清新達意の文筆により文学的影響力もすくなくなかったが、関東大震災の混乱に乘じ、妻伊藤野枝と共に憲兵の手で殺された。

奴隸根性論

一

斬り殺されるか、焼き殺されるか、あるいはまた食い殺されるか、いずれにしても必ずその身を失うべき筈の捕虜が、生命だけは助けられて苦役につかせられる。一言にして言えば、これが原始時代における奴隸の起源のもっとも重要なものである。

かつては敵を捕えればすぐさまその肉を食らった赤色人種も、後にはしばらくこれを生かして置いて、部落中寄つてたかつて、てんでに小さな炬火をもって火炙ひやきにしたり、あるいは手足の指を一本一本切り放つたり、あるいは灼熱した鉄の棒をもって焼き焦したり、あるいは小刀をもって切り刻んだりして、その残忍な復讐の快楽を貪った。

けれどもやがて農業の発達は、まだ多少食人の風の残っていた、蛮人のこの快楽を奪ってしまった。そして捕虜は駄獣として農業の苦役に使われた。

また等しくこの農業の発達とともに、土地私有の制度が

起った。そしてこのこともまた、奴隸の起源の一大理由として数えられる。現にカフィールの部落においては、貧乏という言葉と奴隸という言葉とが、同意味に用いられている。借金を返すことのできない貧乏人は、金持の奴隸となつて、毎年の土地の分配にも与あずからない。そして犬と一緒になつて主人の意のままに働いている。

かくして従来無政府共產の原始自由部落の中に、主人と奴隸とができた。上下の階級ができた。そして各個人の属する社会的地位によつて、その道德を異にすることが始まつた。

二

勝利者が敗北者の上に有する権利は絶対無限である。主人は奴隸に対して生殺与奪の権を持つてゐる。しかし奴隸には、あらゆる義務こそあれ、何等の権利のあらう筈がない。

奴隸は常に駄獣や家畜と同じように取扱われる。仕事のできる間は食わしても置くが、病氣か不具にでもなれば、容赦もなく捨てて顧みない。少しでも主人の氣に触れば、すぐさま殺されてしまふ。金の代りに交易される。祭壇の前の犠牲となる。時としてはまた、酋長が客膳を飾る、皿の中の肉となる。

けれども彼等奴隸は、この残酷な主人の行いをもあえて

三

無理とは思わず、ただ自分はそう取扱わるべき運命のものとばかりあきらめている。そして社会がもつと違つたふうに組織されるものであるなどは、主人も奴隷もさらに考えない。

奴隷のこの絶対的服従は、彼等をしていわゆる奴隷根性の卑劣に陥らしむるとともに、また一般の道德の上にもはなはだしき頹敗を帰さしめた。一人が道德的に完成せられるのは、これを消極的に言えば、他人を害するようなとして自分を墮落さすような行為を、ほとんど本能的に避ける徳性を得ることにある。しかるに何等の非難または刑罪の恐れもなく、かつ何等の保護も抵抗もないものの上に、容赦なくその出来心のいっさいを満足さすというがごときは、これとまったく反対の効果を生ずるのは言うまでもない。飽くことを知らない暴慢と残酷とが蔓^{はひ}こる。

かくして社会の中間にあるものは、弱者を虐待することに馴れると同時に、また強者に対しては自ら奴隷の役目を演ずることに馴れた。小主人は自らの奴隷の前に傲慢なるとともに、大主人の前には自らまったく奴隷の態度を学んだ。

強者に対する盲目の絶対的服従、これが奴隷制度の生んだ一大道德律である。そして主人および酋長に対するこの奴隷根性が、その後の道德進化の上に、いかなる影響を及ぼしたかは次に見たい。

先きにも言ったごとく、奴隷は駄獣である、家畜である。そして奴隷はまず、家畜の中の犬を真似た。

カフィール族はその酋長に会うたびに、「私はあなた様の犬でございます」と挨拶をするという。しかし自分の身を犬に較べるこの風習は、ただに言葉の上ばかりでなくその身振りや処作においても、人間としての躰の許せるだけ犬の真似をするということが、ほとんど例外もないほどにいたるところの野蛮人の間に行われている。

まずその一般の方法としては、着物の幾分かを脱いで、地に伏して、そして土埃を被るにある。

アフリカは奴隷制度のもっとも厳格なところであつた。したがってこの犬の真似の儀式も、ほとんど極端なまでに行われている。

アルゲン島附近のアザナギス族は、酋長の前に出ると、裸になって、額を地につけて、頭と肩とに砂を被る。イシニー族もやはりまず着物を脱いで、腹這いになって、這いながら口へ砂をつめる。

クラツバートン氏によれば、氏がカトウングの酋長に謁見した時、二十余名の大官がいずれも腰まで裸になって、腹這いになったまゝ顔も胸も土まみれになって酋長の傍へ這いつて行って、初めてそこに坐つて酋長と言葉を交え

ることを許されたのを見たという。

ところがこの貴族等はまた、自分が酋長に対してやることを、同じようにその臣下のものに強いる。バロンダ族の平民は、道で貴族の前に出ると、四這いになって、体や手足に土をぬりつける。キアマ族もまた貴族の前に出ると、急に地べたに横になる。

ダホメーの酋長の家では、臣下は玉座の二十歩以内に近よることを禁ぜられて、ダクロと称する老婆によって、酋長へのいっさいの取次ぎをして貰う。まずその取次ぎを請うものは、ダクロの前へ四這いになって行く。そしてダクロはまた四足になって、酋長の前へ這って行く。

四

野蛮人のこの四這いの奴隷根性を生んだのは、もとより主人に対する奴隷の恐怖であった。けれどもやがてこの恐怖心に、さらに他の道德的要素が加わって来た。すなわち馴れるに従ってだんだんこの四這いの行為が苦痛でなくなつて、かえってそこにある愉快を見出すようになり、ついに宗教的崇拜ともいうべき尊敬の念に変わってしまった。本来人間の脳髓は、生物学的にそうなる性質のあるものである。

そして酋長は他の人間以上のあるものになってしまった。

ナチエーの酋長は太陽の兄弟であつた。そしてこの資格をもつて、その臣下の上に絶対権を握っていた。酋長の嗣子は生れるとすぐに、その時母の乳房にすがっているいっさいの嬰兒の主人であるとせられた。

中央アフリカにおいても、大中小の酋長はいずれもみな神権を持っていて、自由に地水風火の原素を使役する。ことに雨を降らすに妙を得ている。

バッテル氏によると、ルアゴンでは畑に雨の必要があると、酋長に願つて空に弓を射て貰う。これは雲にそのつとめを命じさすのである。

そこで人民が酋長に雨乞いを願うと、酋長の方からはその代りに租税を要求するというような争いが起きる。「羊を持つて来なければ雨は降らせぬ」などと威張る。また洪水の時などには、麦幾許を納めなければ永劫にあらしがあなどるなど嚇す。

ブーサ族の酋長が、ヨーロッパでは一夫多妻を禁じていると聞いて、「外の人にはそれも善かろうが、しかし酋長には怪しからんことだ」と言つたという。

アシャンチ族の酋長は、いっさいの法律の上に超絶していて、酋長の子はどんな悪事しても罰せられることがない。そして臣下は酋長のために死ぬことを至上の義務と心得られている。

五

なおこの時代の野蛮人は、一般にごくお粗末な靈魂不滅觀を抱いていた。すなわち人が死んだ後、なお幾許かの間、生きているものと信じていた。死人の影が、地上の生活と同じような生活を、どこかで続けているものと信じていた。

そしてこの天上の生活は、ことに大人物にのみ限られていた。平民や奴隸はこの世限りで死んでしまうのである。そこで大小の酋長が死ぬと、食物だの、武器だの、奴隸だの、女だのと、いろいろなものをその未来の生活に伴って行く。

カライブ族の酋長が死んだ時に、その妻の一人と一緒に葬られた。彼女はこの酋長の子を幾人か生んだというので、ことにこの役目に選ばれたのである。

かつてハワイで、ハワイナポレオンと称せられた、大虐殺王タメハメハの死んだ時などは、大勢の人間の強制的犠牲を供えたのみならず、なお無数の忠良な臣下が自殺または自ら傷つけて不具になった。そしてその後数年間、国民は毎年その日に糸切齒を抜いて、タメハメハを祭った。

ペナン族の酋長の葬式には、墓の側に徳利形の大きな深い穴を掘って、その口から大勢の奴隸や召使を投^なり込んで、そこに餓死^うさしてしまふ。

アジャンチの酋長が死ぬと、その親族のものは外に走って出て、手あたり次第に道に会う人々を殺す。それから数百または数千の奴隸の首をしめる。そして時々また、何か事のあるたびに、天上の酋長に使いするために、幾多の奴隸を殺す。

六

僕はあまりに馬鹿馬鹿しい事実を列挙して来た。今時こんなことを言つて、何のためになるのかと思われるような、ペラポーな事実を列挙して来た。けれどもなお僕に一言の結論を許して戴きたい。

主人に喜ばれる、主人に盲従する、主人を崇拜する。これが全社会組織の暴力と恐怖との上に築かれた、原始時代からホンの近代に至るまでの、ほとんど唯一の大道徳律であつたのである。

そしてこの道徳律が人類の脳髓の中に、容易に消え去ることのできない、深い溝を穿てしまった。服従を基礎とする今日のいっさいの道徳は、要するにこの奴隸根性のお名残りである。

政府の形式を変えたり、憲法の条文を改めたりするのは、何でもな^い仕事である。けれども過去数万年あるいは数十万年の間、われわれ人類の脳髓に刻み込まれたこの奴隸根性を消え去らしめることは、なかなか容易な事業じ

やない。けれども真にわれわれが自由人たらんがためには、どうしてもこの事實は完成しなければならぬ。

征服の事實

樗牛全集の中に、ブランドスの何かの本から抜いた、次の文がある。

「少なくともヨーロッパの四大国民の名は、いずれもみな外国の名である。フランスの名称は、ライン河の西岸に棲んでいたフランク人から来たもので、この国民の祖先たる古のケルト人とは、何の因縁もないのである。イギリスの名は、もとドイツの一地方から来たもので、アングロサクソン民族とは、何の血族上の連絡もないのである。ロシアの名は、もと北方の起原で、スカンジナビアの一族族たる、ロゼルの転訛したものである。プロシヤはプロイセンというスラブの一蛮族の名で、十二世紀の終り頃に、ドイツにはいったのである。」

この事實は、僕が今ここに述べようとするのと、あるいは関係のあるものもあり、あるいはさほどに関係のない

のものもあるかも知れぬ。けれども、これを読んだ時の僕自身に取っては、これが深い社会事實を思わせる、力強い暗示であったのである。

征服だ！ 僕はこう叫んだ。社会は、少なくとも今日の人の言う社会は、征服に始まったのである。

カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスとは、その共著『共産党宣言』の初めに言っている。「由来一切社会の歴史は階級闘争の歴史である」と。けれどもこの階級闘争の以前に、またそれと同時に、種族の闘争があった。そしてそこに、この征服という事實が現れた。

人類がまだ動物の域にいた頃、その住家は、恐らくは熱帯地の何処かであつたろうと思われる。そして多くの事實は、人類の始現を見た地方として、南方アジアを指している。

ここに初期の人類は、自然の富饒の間に暖かい空気の下に、動物のような生活を送りながらも、なお多少環境を変えし、または他の肉食獣を避けもしくは欺くに足る知識もあり、非常な速度で繁殖することができた。そして血族関係から生じた各集団の人口が多くなつて、互いに接触し衝突するようになれば、その集団は思うままに四方八方に移住した。かくして長い間、原始人類の間に、安楽と平和とが続いた。この時代が、昔からよく言う、いわゆる黄金時